

夢のあとさき その7

学校の在り方は、高校だけではなく、幼稚園や小学校から中学校そして高等学校までの学びの大きな道筋を持つことが大切ではないかということをお話しました。地域の子供たちが、どのような場所で育っているのだという大人たちの認識と子どもたちの認識があって、その二つが同心円状にある状況があると、子どもたちは、その認識を具現化する大人たちに憧れ、その生活は、この環境を足場にして地域に広がっていくのではないかと推察します。

具体的には、神社の氏子やお寺の檀家組織、または地域のコミュニティの運営側における様々な連携の在り方を目の前に見て、その姿に憧れ、最終的に地域に帰ってくるのが理想であるでしょう。

例えば、幼いころから飯坂の喧嘩祭りの山車に乗って太鼓をたたくことをずっと続けてきた生徒が、大学卒業後にもその祭りを継承することに使命感を持って福島市に戻ってきたという現実を見ていることなどからも、そこにいる人々へのあこがれは大きなエネルギーになることはあると考えます。

場の魅力は人の魅力によって形成されます。人の魅力は、ささやかな取るに足らないエピソードや出会いによって培われます。ちょっとした一言や立ち居振る舞いによって人は動くのであると思います。その意味、学校の集会での一言一言はとても重要なファクターであると思い、とても気を付けて発言してきた次第です。

この校長便りについても、ゆくゆくは誰か私を追ってくれるものが続けてくれるようになると本望です。といっても、この校長便りたるもの、念仏を上げるようにひたすら唱えることによって綴り続けているだけですが、その根底に流れる人の琴線に届く言葉の力を信じることから始めていく事が大切であります。そのことを前提に書き続ける姿勢こそが新しき何かを掘り当ててくれるものではないかと思えます。

このことをことさら大げさにするでもなく、それでいて軽んじることもなく、空気のように語りながら様々な子供たちの可能性について言及できるなら、こんな幸せはないのではないかとも思えます。

子どもたちは時には妥協し、時には絶望し、時には打ちひしがれ、時には後ろばかり見て過ごすこともままありますが、そんな時こそ笑って後ろから支えることができるようになれば、一つの満足ではないかとも思えます。

語れば語るほど根拠を示すこともできない穴倉に陥る心配もあるのですが、進まない次が生まれないので、語るしかありません。あと60回語ります。語ることで生まれる力を信じています。返す返す申し訳ありません。